〈報告〉

「夏の蟬」の復権

高芝麻子

☆初めに☆

今日は『『夏の蟬』の復権」と題しまして、川合先生のご論文「蟬の詩に見る詩の轉變」（中國文學報五七・一九九八）への一つの考察をご報告したいと思います。まずは今回の私の発表に関係する点を中心に、先生の論文内容を簡潔にご説明します。

古来、中国では蟬は装身具として用いられてきました。しかし文学の中に描かれてきたのは、蟬の姿よりも蟬が露しか口にしない清らかな生き物であると考えられていたこと、秋の時節に鳴くことの二点である、と先生は指摘なさっています。日本でいう「空蟬」のはかなさなどはほとんど取り上げられません。『楚辭』以降、悲秋の風物詩として描かれ、後漢以降、高潔な士大夫の比喩として用いられるようになります。そこから唐代へと到る蟬文学には、純粋に秋の蟬を描いた詠物詩もあれば、寓意に富んだ作品もあり、蟬の鳴き声は郷愁や時の無常の嘆きを触発するものともなっていきました。先生のご論文では、さまざまな作品を取り上げて唐代の寓意性を秘めた、高潔な蟬の表現を分析なさっています。寓意性の強い作品については、今回私の報告とは直接関わりがありませんので、関心をお持

ちの方は各自論文をお読みください。

まず、私の疑問点から申し上げます。日本人の感覚では恐らく、蝉と言えば夏、と連想が働くように思います。現に、和歌では蝉は夏の部立てに入るべき題ですし、俳句でも夏の季語です。しかしツクツクホウシやヒグラシは、秋の部立て、初秋の季語として用いられていました。蝉と言えば一般に夏のものではありますが、鳴く期間が長いので、種類によっては秋の景物にもなりえたのでしょう。

そのような日本の季節感覚がありましたので、中国古典詩歌の世界において、蝉は秋のものであったというご指摘は、私にはとても不思議なものに思われました。真夏の蝉は、一体どうして、中国文学の中から消えてしまったのでしょうか。そして完全に描かれなくなってしまったのでしょうか。ご指摘を踏まえつつ、真夏の蝉の消息を追ってみたいと思います。

☆蝉の種類と鳴き声☆

まず、本題に入る前に蝉の種類と鳴き声についてご説明いたします。蝉の呼称というのはたくさんありまして、実際、調べれば調べるほど、どの蝉が何であるのか、あるいはどこまでが蝉でどこからが別の虫なのかも分からなくなるほどの混乱ぶりです。今回は蝉の呼称を整理するのが目的ではありませんので、いくつかの蝉の呼称を羅列するに留めたいと思います。

（漢語大詞典などより古典の蝉）

蜩、蜩粱、蜩螗、蜩螳、蜩蟬、蜩蜆、蜩蚻、蜩螃、寒蟬、寒蜩、寒蜨、螗蜩、螳、螗蛦、螇、蟪蛄、蜆、蚻蜻蛉

などなど。

（中日大辞典より現代語の蝉）

ツクツクホウシ：寒蟬　／　ハルゼミ：雨春蟬　／　ミンミンゼミ（総称）：鳴蟬　／　エゾゼミ：花蛾蟬　／　クマゼミ：馬蟬、蚱蟬　／　アブラゼミ（総称）：鳴蜩　／　ヒグラシ：蟪蜩

いずれにしても、時代が下るにつれて「蟬」の用例が大半になり、『全唐詩』検索によれば「蜩」は二六例、うち二例は序・詩題に含まれるもの、「蟪」は五例、うち一例は校勘に含まれるもの、しか見られなくなります。女性の装身具の描写なども含むとはいえ、「蟬」の用例が五〇〇例を軽く上回ることからも、唐代ごろに一般に使われる詩語は「蟬」であったと言えるでしょう。以下、「蟬」という語を中心に用例を見ていくのは、恣意的に他の語を排したためではなく、用例の数量的な問題によるものです。ご了承下さい。

現代中国語の蝉については、だいたい、日本と棲息している蝉の種類に大差がないことを確認するためのリストアップしたものです。これを見る限り、夏から秋にかけて蝉は鳴き続けていると思われます。

次に蝉の鳴き声を列挙しました。さまざまな表現がありますが、比較的古い時代から用例があるものは、lie4 lie4 や hui4 hui4 といったLやHから始まる軽い響きの音が多く、冷たさを感じさせます。時代が下るにつれて、ZHから始まる濁った音が多くなるようです。

噦噦 [hui4hui4]　蟬鳴聲。（漢語大詞典）「詩經・小雅・小辯」菀彼柳斯　鳴蜩噦噦

象聲詞。所指隨文而異。（一）鳥獸蟲的鳴叫音。（漢語大詞典）

「楚辭・招隱士」歲暮兮不自聊　蟪蛄鳴兮啾啾

啾啾 [jiu1jiu1]

寒冷貌。（漢語大詞典）

冽冽 [lie4lie4]

魏・曹丕「于清河見挽船士新婚與妻別」冽冽寒蟬吟　蟬吟抱枯枝

象聲詞。蟬鳴聲。（漢語大詞典）

哢嘤 [zheng1ying2]

晉・陸雲「寒蟬賦」体貞粹之淑質　哢嘤之哀聲

烈烈［lie4lie4］　象聲詞。（漢語大詞典）謝惠連「搗衣」肅肅莎鷄羽　烈烈寒螿鳴

噦唳［hui4li4］　蟬鳴聲。（漢語大詞典）

唐・沈鵬「寒蟬樹」忝有翩翾翼　應憐噦唳聲

咽咽［ye4ye4］　謂聲音低啞。（漢語大詞典）

唐・齊己「蟬八韻」咽咽復啾啾　多來自早秋

鏘鏘［qiang1qiang1］　象聲詞。（三）鳥蟲鳴聲。（漢語大詞典）

清・惲敬「釋蟪蛄」蜺、寒蟬。……其聲鏘鏘如舞鐃。如鈴。

札札［zha2zha2］　象聲詞。（漢語大詞典）

清・惲敬「釋蟪蛄」蛩蜻蜻……似蜺、而猶小青赤色、其聲札札如繅。

知了［zhi1liao3］　蟬的鳴聲。（漢語大詞典）……用例は近現代のもののみ。

☆夏の蝉が鳴いていたころ☆

前置きが長くなりましたが、ここから本題に入ります。

詩經　豳風「七月」

四月秀葽　五月鳴蜩　八月其穫　十月隕蘀　一之日于貉　取彼狐狸　爲公子裘

二之日其同　載纘武功　言私其豵　獻豣于公

四月には茂れるひめはぎ、五月にはせみの声。八月には早稲を刈り、十月にはうるしの枝下ろし。一月には（豊饒祈願の）魂祭りをし、きつね狩りたぬき狩り、尸となる御方のかわごろもにしよう。二月には皆そろって、狩猟のけいこ。小さき獲物は我々に、立派な獲物は御霊屋へ。（明治書院・新釈漢文大系『詩経』より引用）(1)

川合氏も挙げておられますが右に引用しました「詩経・豳風・七月」には「五月鳴蜩」とあります。文字は「蜩」ですが、陰暦五月という真夏に鳴くのですし、ここではいわゆる「蟬」と考えてよいと思います。真夏を象徴するものとして、蟬が描き込まれているわけです。

また、『禮記』の「月令篇」には仲夏（五月）のものとして「蟬始鳴」とあり、孟秋（七月）のものとして「寒蟬鳴」と述べられています。要するに、夏の蟬と秋の蟬がともに風物詩として認められているのです。

この二例は、現代日本人の蟬の季節感と、かなり重なってきます。特に『禮記』の例では、「蟬」とだけ書かれたものは夏の蟬で、秋の蟬はわざわざ「寒蟬」と書き分けられているのです。当時の感覚としてはむしろ「蟬」といえば夏だったのではないかと思います。

六朝に入っても夏の蟬は鳴き続けるようです。夏の蟬は秋の蟬ほどは見られないのですが、探してもなかなか見いだせない「ごく少数」の存在ではありません。以下のように、ちらほらと見いだせるのです。

孫楚（二二一？―二八二？）「蟬賦」部分（全晉文巻六十）

當仲夏而始出　仲夏（陰暦五月）になってようやく現れ
據長條而悲鳴　長い枝にしがみついて悲しげに鳴く

「夏歌二十首其十一」全文（樂府詩集巻第四十四　清商曲辭一　呉聲歌曲晉宋齊辭　子夜四時歌七十五首）

林鵲改初調　林のカササギは最初の歌い方を改めて
林中夏蟬鳴　林の中では夏の蟬が鳴いている

梁・簡文帝（五〇三―五五一）「聽早蟬」部分（全梁詩巻二十二）

草歇鵾鳴初　草は生えそろい　ホトトギスは鳴き初め

蟬思花落後　蝉は物思うように鳴く　花の散り落ちた後

（題：ホトトギスのこと。夏の三ヶ月間、昼夜問わず鳴き続けると言う。）

孫楚「蟬賦」では『禮記』の表現をそのまま踏まえて、蝉を真夏、陰暦の五月に鳴くものとして描いています。ですが、『禮記』の方向性とは逆に、楽府民歌「夏歌」では夏の蝉をわざわざ「夏蟬」と表現し、簡文帝「聽早蟬」でも夏の初めの蝉に「早」を冠しています。これは次第に蝉が秋のものであるという認識が強まった結果であるのかも知れません。

☆夏の蝉が黙るころ☆

本来、夏から秋にかけて鳴き続ける蝉の描写は、唐代に入ると激減するように思われます。『全唐詩』の検索で蝉の文字をしらみつぶしに探したのですが、管見の限りにおいては、初盛唐の詩で、「夏の蝉」と確かに分かるものは、次の二首だけでした。

陳子良（？―六三二）「夏晩尋于政世置酒賦韻」部分（全唐詩巻三九）

長楡落照盡　立派な楡に　夕陽は沈んでしまって

高柳暮蟬吟　高い柳に　暮れ時の蝉が鳴く

李頎（六九〇―七五一）「夏宴張兵曹東堂」部分（全唐詩巻一三三）

北窗臥簟連心花　北向きの窓　竹の寝椅子に横たわれば　連心の花咲く（連心：合弁花）

竹裏蟬鳴西日斜　竹林　蝉鳴いて　西日傾く

いずれも、夕方の風景の中に描き込まれていて、やはり真夏の暑さよりもむしろ、和らいだ暑さを暗に示すべく用

いられています。この作品以外では、季節感を示すものとして描かれる蝉は、晩夏から初秋にかけての、秋の気配を告げる蝉が大半でした。

たとえば詩の中で用いられる「新蟬（漢語大詞典によれば「初夏的鳴蟬」、初夏の蝉）」、あるいは「早蟬」という語は、実際は大半が秋の訪れを感じさせるものとして描かれています。漢語大詞典が言うような「夏の蟬の走り」ではなく、実際の作品の中では、主に詩人に秋を感じさせる「秋の蟬の走り」の役割を担わされるのです。

また、蝉が秋のものであるとすれば、楽府民歌「夏歌」に見られた「夏蟬」という語は、唐代には用例が増えるように思われるのですが、『全唐詩』の中で韋應物（七三五―七九一？）に一例使用されているのみでした。

夏の蝉はほとんど見られない、と書きましたが、タイトルや作品中に「夏」のできごとであるとはっきり書いてあるにもかかわらず、夏の蝉ではないもの、という不思議な蝉が実は唐詩にはたくさん見られるのです。次に例を挙げます。

裴迪（七一六―？）「夏日過青龍寺謁操禪師」部分（全唐詩巻一二九）

鳥飛爭向夕　鳥は飛んで　先を争う夕暮れ
蟬噪已先秋　蝉は騒がしく　もう秋を先取りしている

杜甫（七一二―七七〇）「夏日李公見訪」部分（全唐詩巻二一六）

清風左右至　清らかな風があちこち吹き抜けて
客意已驚秋　旅人の心は　もう秋が来たことに驚く
巣多衆鳥喧　巣は多くあるので　集まった鳥たちは騒がしく
葉密鳴蟬稠　葉はまだ茂っているのに(2)　鳴いている蝉は多い

このように詩人が蝉の声を聴いて、秋を感じる場合、それはいかに季節が夏であっても夏の風物詩ではなく、秋の風物詩として描かれていると考えなくてはならないでしょう。

ではなぜ、蝉は秋だけの風物詩となり、夏の蝉は沈黙したのでしょうか。二つの理由を指摘したいと思います。

まずは文学における秋の美学、「推移の悲哀」や郷愁などと、「悲」「哀」と表現され、高潔な士大夫を連想させる蝉のイメージが、文学的に結びつきやすいことが挙げられるでしょう。蝉はしばしば、その声を「悲」「哀」と表現され、あるいは、蝉の声を聴いた詩人の心境が「悲」「哀」と述べられます。悲秋という言葉があるように、悲哀は秋に結びつきやすい感情です。蝉の声を「悲」「哀」と捉える共通理解が成立したことで、蝉が秋のものであるとの了解が強まったのではないでしょうか。

李端（七三二―七九二）「長安書事寄薛戴」部分（全唐詩巻二八四）

朔雁去成行　北へ向かう雁は列をなして飛び
哀蟬響如昨　悲しげに鳴く蝉は去年と同じように歌う

王維（？―七六一）「早秋山中作」部分（全唐詩巻一二八）

草間蛩響臨秋急　草間のコオロギの響きは　秋が近づけばあわただしく
山裏蟬聲薄暮悲　山中の蝉の声は　暮れが迫って悲しげである

孟浩然（六八九―七四〇）「秦中感秋寄遠上人」部分（全唐詩巻一六〇）

黄金然桂盡　家財は物価の高さに使い尽くし（然桂：桂を薪代わりにする。物価高騰の比喩）
壮志逐年衰　壮志は年を追って衰えてゆく
日夕涼風至　朝に夕に　涼風の吹き来たり

聞蟬但益悲　蟬の声を聴けば　悲しみはいや増すばかり

もう一つには文学における夏の描きにくさが挙げられると思います。

中国古典詩における春秋と夏冬の差異として第一に指摘すべき点は、春秋の詩の多さと夏冬の詩の乏しさ、という明白な事実である。（松浦友久「中国詩歌原論」五頁）

『詩経』『楚辞』以来の長い伝統のなかで、中国古典詩の春秋には、「惜春・傷春・春恨……悲秋・感秋・秋興……」など、一連の心情や情緒が、その季節にふさわしい詩的要素として共有されるようになっている。逆に、夏・冬については、「苦熱・苦暑・毒熱……苦寒」といった一連の生理感覚が共有されるだけであり、心情・情緒の次元に属するものは全く共有されていない。（同二六頁）

と、松浦先生も述べておられるように、秋の詩に比べて夏の詩は数量的に圧倒的に少ないのです。そうなれば、秋の蟬が夏の蟬より多く見られるのは、ある意味、当然といえば当然の帰結です。

☆「夏の蟬」の復権☆

初盛唐の詩では、夏の蟬がほぼ絶滅したことをご説明しました。しかし中唐以降、「夏の蟬」の復権が徐々に始まります。復権した「夏の蟬」の描かれ方は、およそ以下のようなパターンに分けられそうです。

一つ目、夏の蟬であっても声に「悲哀」を読みとり、時間の流れの無常など、世の悲哀に思いを馳せるもの。秋の美学と蟬の結びつきのところで例に引きました李端や孟浩然をご覧下さい。秋の蟬は過ぎさった時間や自分の老いなどへの感慨と切っても切れない関係にありました。

二つ目、秋の風物詩と理解し、蟬が鳴くのにまだ秋ではない、と、詩の伝統的理解を逆手にとって詠い込むもの。秋の訪れを告げる蟬との違いは、詩人がその季節をもう秋だと認識しているか、まだ夏だと感じているかによって判

別しました。

そして三つ目、声に涼しさ・清らかさを感じ取るもの。これは蝉は秋のものである、という認識から、連想されるものだと思われます。

実際の作品を例に説明しますと、まず一つ目、二つ目のパターンについては白居易（七七二―八四六）の「早蟬」を挙げたいと思います。

白居易「早蟬」全文（全唐詩巻四三三）

六月初七日　六月の七日
江頭蟬始鳴　川縁には蝉がようやく鳴き始めた
石楠深葉裏　石楠の生い茂った中で　（石楠：バラ科の植物。オオカナメモチ。）
薄暮兩三聲　夕が迫る頃　二声三声
一催衰鬢色　それを聞けば　老いを感じずにはおられず
再動故園情　さらに　望郷の念に突き動かされる
西風殊未起　西風はまだ吹いていないというのに
秋思先秋生　秋の愁いが　秋になる前に生まれてしまった
憶昔在東掖　思い出すのは昔　宮中に居て
宮槐花下聽　宮廷の槐の花の下　蝉の声を聴いた日
今朝無限思　今朝　想いはさらに深まって果てしなく
雲樹繞湓城　雲に届きそうな樹が　湓城を取り巻いている（湓城：江西省の地名）

作品の冒頭で六月七日と日付が明示されていますので、この「早蟬」は秋の走りの蝉ではないと理解して良さそう

です。

やはり初盛唐の詩人たちと同様、この蝉も夕暮れ時に鳴いています。

五、六句では白居易はその声に触発されて自らの老いを覚え、また、望郷の念に突き動かされます。八句目では、彼は秋になっていないのに秋の愁いが生じたと述べ、蝉が秋のものであり、蝉によって触発される物思いが秋のものであるべきだという、一般的な認識を逆手に取った興味深い表現を作り上げました。これは裴迪「夏日過青龍寺謁操禪師」の表現を一歩進めたものとも言えるかもしれません。

そして、九、十句で詩人は都での日々を想起しますが、ここでは蝉の声は、感傷を引き起こす「悲哀」に満ちたものとしてではなく、おそらくは楽しかった日々の中で聞いた記憶を呼びさますものとして登場しているのです。悲哀を連想させる一般的な記号ではなく、ここでの蝉の声は白居易の具体的な思い出であると言えるでしょう。

続いて羊士諤（七五六―？）の「南池荷花」を読んでみたいと思います。

羊士諤「南池荷花」全文（全唐詩巻三三二）

蟬噪城溝水　蝉賑やかに鳴く　城を廻る水辺
芙蓉忽已繁　蓮の葉が　気付けば生い茂っている
紅花迷越艶　紅の花は　西施のように人を迷わせ（越艶：西施のような越の美女）
芳意過湘沅　匂うような風情は　湘沅の女神よりも麗しい
湛露宜清暑　湛える露は　清暑にふさわしく
披香正滿軒　広がる香りは　家の辺りまで満ちる
朝朝只自賞　朝な朝な　ただ蓮の花を愛でてさえいれば
穠李亦何言　花盛りの李を　望むまでもない

この作品は蓮の花の美しさを詠むものですが、歌い出しに蝉の声を「さわがしい」と描いていることは注目に値するのではないでしょうか。この蝉の声は、明らかに夏の蝉であり、郷愁や自らの老いを喚起するものでもなければ、悲哀の響きを感じさせたり、秋の予感を与えたりするものでもありません。

詩人はこの蓮の花咲く世界を、第五句で「清暑」とまとめています。もちろん、この「清暑」という表現の核は蓮の花ですが、蓮の咲く空間には冒頭の蝉の声も含まれていますし、蝉の声はその清らかな暑さに逆らう存在ではありません。むしろ、その清らかさを強めているようです。「清暑」という語は、それほど多くの用例がある言葉ではありません。宮殿の名前、清暑宮を指す場合を含めて、『全唐詩』では十三例しか見られません。そんな中で、羊士諤がうち二例を占めていて、もう一例も蝉との組み合わせで用いられており、そこに現れているのは彼の独自の季節感覚であったのかもしれません。

いずれにせよ、この作品は、蝉が夏の風物詩として、「涼しく清らかな」イメージを維持しながらも、暑い空間に描き込まれていることを評価したいと思います。また、夕暮れの蝉が初盛唐に多いことを指摘しましたが、蓮の花が咲いているこの詩では、朝に鳴く蝉であることも注目に値するでしょう。

結局、唐代の詩人たちは、『詩經』や『禮記』のように真夏の蝉をそのままに描くことはできませんでした。どうしても蝉を描こうとするとき、先入観として、哀しい想いをその声に聞き、秋の気配を感じる感受性回路が彼らの中に存在してしまっています。ですが、それでも、夏に鳴く蝉の姿、声が、中唐以降、詩人たちによって再発見され、あるいはその感受性回路を逆手に取った表現を試みられたことは、評価されても良い、と思います。

と、ここまで述べてきたのは全体的な流れですが、実はごく少数ながら、暑くてたまらない真夏の蝉も見られるのです。中晩唐の詩人姚合と貫休の詩をご覧下さい。

姚合（七八一？―八四六？）「夏日書事寄丘亢處士」部分（全唐詩巻四九七）

暑天難可度　この暑い日をどうやって乗り切ろうか
豈復更持觴　酒を飲む気さえおきない
樹裏鳴蟬咽　木立の奥では　鳴蟬が咽び
宮中午漏長　宮中では　昼間の時間がやけに長い

貫休（八三二―九一二）「苦熱寄赤松道者」部分（全唐詩巻八二六）

天雲如燒人如灸　空の雲は焼けこげそうで　人間は火を噴きそうで（灸：焼灼）
天地鑪中更合適　この暑さは造化の炉の中とでも言った方が　ふさわしい
蟬喘雷乾冰井融　蟬は喘ぎ　雷は乾き　氷室の氷は溶け始める
些子清風有何益　わずかばかりの涼やかな風がどれほどの役に立とう

酷暑を描こうとしたとき、姚合は蟬が咽ぶという、そして貫休は蟬が喘ぐという表現を編み出しました。それはすなわち、彼の耳が秋の蟬、哀しい音色という伝統を越えて、真夏の暑苦しい蟬の声を捉えようとしていた、あるいは酷暑の中で彼と蟬とは同じ境遇を分かち合うもの同士と感じていた、ということでしょう。

ここで、一つ、詩の読みについて、疑問を呈しておきたいと思います。姚合の蟬は、間違いなく咽び鳴いていますが、貫休の蟬は果たして鳴いているのでしょうか。私は喘ぐという表現を、断末魔のように鳴く真夏の暑苦しい蟬時雨と理解しましたが、事前の学習会でぜいぜい喘ぐばかりで鳴くこともできない、との解釈が出されました。そういう理解もありえるはずですし、興味深い読みだと思いましたので、後ほど、みなさんのご意見をうかがえたらと期待しております。

☆宋代の蝉〜蘇軾を中心に☆

さて、では結びに代えて宋代の蝉について少し言及したいと思います。中唐以降、内部にさまざまな要素を加えつつ、戻ってきた「蟬」は、宋代以降は特段大きな変化をすることなく、しかし確実に「悲哀」という呪縛から解き放たれつつ、脈々と描き出されています。

まずは蘇軾（一〇三六―一一〇一）の蝉の描写を二つ取り上げてみましょう。蘇軾という詩人は、長い伝統の中で培われた蝉のさまざまな面を、アレンジを加えつつ自在に描き出しています。長いタイトルですが、「都を出て陳に来たり、乗る所の船上に小詩八首の題する有り、知らず何人か余の心を感ぜしめる者有る、聊か為に之に和す、其一」をご覧下さい。この四句で全文です。

蘇軾「出都來陳所乘船上有題小詩八首　不知何人有感於余心者聊爲和之其一」全文（蘇軾詩集巻六）

蛙鳴青草泊　蛙が鳴く　水草茂る渡し場
蟬噪垂楊浦　蝉が騒ぐ　柳垂れる水辺
吾行亦偶然　私がここに来たのも　たまたまなのだけれども[3]
及此新過雨　来てみたら　通り雨にでくわして気分さっぱり

蛙と蝉が水辺でにぎわしく鳴いています。蛙と蝉が対になっている句は韓愈、元稹などに先例がありますが、ここでは特にそれらが典故として用いられているわけではないようです。蘇軾のコミカルな対からは、秋の悲哀などとは切り離された明るい世界を描こうという詩人の姿勢が垣間見えます。偶然訪れた場所、たまたま出くわした通り雨。そしてすっきりと清々しい気分。詩人は羊士諤をさらに軽やかにしたような心地よい暑さの中にいて、その暑さ自体を楽しんでいるようです。羊士諤の清らかな暑さに比べても、蘇軾の蝉の働きはずっと重要で、清々しさを構成する

大きな要素の一つになっています。

もう一首は詞ですが「鷓鴣天」をご覧下さい。

「鷓鴣天」全文（東坡樂府卷上）

林斷山明竹隱牆　林は途切れ　山は明るく　竹は牆を隠し
亂蟬衰草小池塘　乱れ鳴く蟬　枯れゆく草　小さな池
翻空白鳥時時見　空をひらりと舞う白い鳥　隠れてはまた見えて
照水紅蕖細細香　水に照り映える紅い蓮の花　ひそやかに香る

村舍外　古城旁　村里の外　古ぼけた城壁のあたり
杖藜徐步轉斜陽　杖を突いて　のんびり歩けば　陽はさらに西に傾く
殷勤昨夜三更雨　心に優しい　昨日の深夜の雨
又得浮生一日涼　また手に入れた　浮き世の暮らしに　一日の涼しさ

枯れかけの草「衰草」とともに乱れ鳴き降り注ぐ蝉時雨。ここに描かれた蝉は、秋の気配の中にあります。[4] ですが、詩人の心は郷愁や老いへの愁いに閉ざされて、秋の物思いに耽る……と思いきや、少なくとも蘇軾はその作品中におのれの愁いを訴えはしません。蝉の声に愁いを触発された、と書くべき詩の伝統をうち捨てて、蘇軾はただ秋の風物詩として、池の端で鳴く秋の蝉を描いているのです。蘇軾は、夏の蝉を悲哀から解放しただけでなく、秋の蝉までも悲哀から解放してしまいました。

蘇軾の詞や詩での「蝉」の用例は合計一六例であります。もっとも、断片的にしか残っていない句は数に含めていません。その一六例を大雑把に三つに分類すると（一つの詩句にいろいろな要素が含まれるので厳密に分類することは難し

いのですが[5]、秋の蝉は六例、夏の蝉は五例、高潔な隠者や道教的寓意を持つ蝉は五例と、見事にバランス良く描き分けられています。蘇軾ほどバランス良くさまざまな蝉を描いた詩人は特異な例でしょうし、この分類自体、読む人に人によって大きく数が変わるかも知れませんが、唐代にはあまり見られなかった夏の蝉を含めた、三つの要素をどれも積極的に取り入れていると言えるでしょう。

宋代の蝉には他にもさまざまな新しい表現が見られます。

陸游（一一二五―一二一〇）「六月一日曉賦」部分（劍南詩稿卷四三）

視夜明星高　夜空を見れば　明けの明星は高く輝き
蟬聲滿庭樹　蝉の声は　庭の木々に満ちあふれて響く

張耒（一〇五四―一一一四）「六月五日苦暑」（全宋詩卷一一八〇）

炎炎萬物息　じりじりと灼けるような暑さ　万物はじっと息を潜め
聒耳唯鳴蟬　耳を騒がすは　ただ蝉の声だけ

陸游「歳晚　又」部分（劍南詩稿卷四一）

花前鯨吸猶堪酒　花の前で鯨飲しても　まだまだ酒は飲める
窗底蟬嘶未廢詩　窓辺に蝉の喚き　いまだに詩作をやめない

陸游の「六月一日曉賦」は、明け方、まだ暗いうちに鳴き始める蝉です。まだ夏の盛りであり、これから暑さを予感させる早朝の蝉は、秋や郷愁、老いへの予感とは無縁の、エネルギーに満ちたものだと言えるでしょう。

また張耒の「六月五日苦暑」となると、文字通りの酷暑を描き出すときに蝉が選ばれています。貫休の描こうとした暑さと共通するものがあります。やはり、松浦先生がご指摘なさっているように、夏の感慨・感傷というものは特

になく、ただ夏には暑さ、あるいはその最中のちょっとした涼しさという生理的感覚を描くほかないようです。

もう一首、陸游の「歳晩」ですが、これはなんと冬の蝉を描いています。もちろん、冬に蝉が実在するはずはなく、老いてなお詩を作り続ける自らの姿を、冬になっても鳴き続けるうるさい蝉と描き出し、揶揄している句なのですが、ここでは韓愈の「士を薦む」という詩を踏まえています。

韓愈「薦士」（全唐詩巻三三七）

齊梁及陳隋　　齊梁から陳隋にかけて
衆作等蟬噪　　誰も彼もが詩を作って蝉が歌い喚くようだった

六朝後半の文学は蝉が集まって鳴き喚いているようだ、という韓愈の南朝文学への批判表現を逆手にとって、自らの姿に重ねているのです。

夏のものであるべき蝉が冬に鳴いているように、老いてもまだ詩作にしがみついている自分自身、そして低俗な文学の象徴として描かれた騒がしい蝉に自らを重ね合わせて、詩人は実際に年の瀬を迎え、人生の暮れを迎えようとしています。これは、韓愈の比喩を典故として用いる以上の、蝉の描かれ方の伝統を巧に逆手に取ったパンチの効いた句ではないでしょうか。

宋代の蝉は、中唐以降の順調な発展の上にあると同時に、真夏の蝉を復活させ、また新たにさまざまな表現を生み出していきました。

ここで取り上げた作品はほんのわずかですし、私もまだ全ての蝉作品を読破したわけではありません。蝉を描くことが持つ意味、あるいは詩人によって持たされる意味は、時代によって大きな変化を遂げました。夏の蝉という、日本人にとっては当然のようで、実は唐詩の世界では特異な存在であった「真夏の風物詩」は、中唐以降、次第に復権してゆきます。それはもともと、『詩經』や『禮記』にあった季節感に戻るだけでなく、そこに至るまでに蓄積され

てきたさまざまな要素を受け止めつつ、新しい蝉の表現を、獲得したとも言えるのではないでしょうか。

ご質問、ご意見など、ございましたら、ぜひ、お願いいたします。

〈討論〉

大山：はじめに、本当にそうかしらと感じるのは、中国文学の中から消えてしまったというのは、真夏の蝉？

高芝：現代文学だとむしろ、真夏の蝉の方が多く見られるのかもしれません。

大山：とすると？

高芝：私が申し上げたかったのは、真夏の蝉は、初唐盛唐の辺りでは、少なくなっているということと、川合先生の論文を拝読した限りですと、秋の蝉の方が多いということ、これは古典文学の中ですが、そういう事実の指摘です。

大山：では、今日の全ての議論は、古典のこと、それも宋代まで？

高芝：宋代までしか、私は確認できていないので、現代文学については、ごめんなさい、分からないのですが。

大山：そうですか、分かりました。そうすると、私は少し納得してきました。

高芝：ありがとうございます。

大山：それから蝉の名前と鳴き声を、資料にいっぱい出していただきました。ただし、おそらくもっともっとあると思います。

高芝：すごくたくさんあります。私が見付けたものの、三分の一くらいしか書いてないんです。

大山：そうですよね。現代語の中には、「知了」というのを出してくれましたけれど、私は最初に、蝉は子供の頃いっぱい取って遊んだけれど、どうしてこの発音をしたことがないんだろうと苦しくて、一生懸命、自分が子供の頃、蝉

をどういう風に呼んでいたか考えて、やっと思い出しました。その発音は「zhi4niao3」というんです。「知了」とは似ているんですけど、どういう漢字を書くか、私は書いたこともないし、分かりません。ですが、「zhi4niao3」というのは北京の言葉です。東北の中国人の先生に聞いたら、「ming4ger4」って言うそうです。では漢字は何ですか？と聞いたら、その先生は「いや、分かりませんけど、ming4はおそらく、命のming4でしょう」って。つまり「助けて！命を助けて！」という意味で鳴いているというふうに聞いたんですよね。

それからもう一つ、蝉がどういう風に文学作品に取り入れられているかですね。今日は現代文学とは関係ないから、私が言おうとしていることは、的はずれなんですが、現代だと蝉の季節は確かに夏なんですけれども、季節よりもずっと強いものは気持ち、それも清らかなんてこととは全く関係なく、苛立ちとか焦りとか、そういう感情が、蝉の声に込められている。だから、思い出すのは、大戦直前の静まりかえった空気の中で、その「zhi4niao3」がジージージーと鳴くというような場面です。だから今読んだ姚合から貫休、それから張耒、その辺りの蝉がうるさいという詩を見ると、ああ、こういう表現はちゃんと古典の中にあるんだ、と思うわけです。むしろ私たち、特に私の感覚としては、こういうものを受け継いだんですね。ですから、季節を感じるというよりも、生理感覚と直接に結びついていると感じています。

高芝：苛立ちや焦りというのは暑さに由来するものではないのでしょうか？

大山：たとえば、山の中で道に迷って、一人でおろおろしているとき、人の気配も全くない山道で、蝉の声が「ジージー」と聞こえてくる。すると、「ああ道はどこだ？どこだ？」という、そういう焦りや苛立ちです。映画やラジオでは、こういう組み合わせがよくあると思います。戦争の映画ですと、日本軍がもうそろそろ入ってくる。そして八路軍が待ち受けている。非常に緊張して、その時間があまりにも長くて耐えられない。そういう感じを蝉の声が効果的に表現しているという例があると思います。以上です。

高芝：ありがとうございます。

戸倉：これは勉強会の時は気づかなかったのですが、羊士諤の詩に出てくる「清暑」は、「暑さを清める」でしょう。「清暑」という言葉は詩には少ないということでしたが、確か賦のタイトルで「清暑の賦」というのがあったと思います。次の「軒を満たす」という語と対になっているのでしょうから。

高芝：あ、そうですね。そうすると「宜しく暑さを清むべし」……

戸倉：そうですね。清らかな暑さと読むと、ちょっと違うんじゃないでしょうか。

高芝：でも、暑さを清める役割として、蓮の花の他に蝉の声が機能しているということがあるのでは？

戸倉：蝉の声まで機能していると書いてあるでしょうか？主にこれは蓮の花の露や香りが暑さを清めてくれるということですよね。暑さをこう、耐えやすいものとしてくれると。

高芝：そうですね。

戸倉：蝉はさかんに鳴いているけれど、それを、邪魔はしていないようですね。

高芝：では、暑さを増幅する装置として蝉が描かれているわけでは？

戸倉：ではなさそうですね。蝉の声が、「清暑」の働きをしているとまでは、書いていないようですが、それを妨げているようでもない。

高芝：今のところを補足させていただくと、羊士諤の作品でもう一つ「清暑」、「暑さを清める」という句があるというふうにご報告したのですが、それはレジュメに引いていません。これは蝉が暑さを清めるのだろうという部分なので、黒板に書きます。

（板書）風蟬一清暑　應喜脱朝簪(6)

高芝：これだと、「風と蟬の声がひとえに暑さを清めて」というように、暑さを清めるものが蟬の声であると読めると思います。

戸倉：その詩の、タイトルは？

高芝：……ごめんなさい。タイトルを控えてきてないかもしれないです。

川合：「風蟬」は風と蟬ではなく、「風蟬」ではないでしょうか。

高芝：風と蟬と私は読んでいたんですが、「風蟬」で一つですか？

川合：風に乗って蟬の声が聞こえるという意味ではないですか。

高芝：そうですね。私の考えていたのもだいたいそんな感じです。次の句は「應に喜びて朝簪を脱がんとす」なんでしょうか。

戸倉：朝簪を脱ぐとはどういう意味ですか？

高芝：きちっと調べていないのですが、「朝簪」は宮仕えの堅苦しい衣裳というようなものを象徴しているのではないかと思うので、何か解放感を読みとれば良いんじゃないかと思います。ちゃんと全文を引っ張ってくれば良かったんですけれど、手元のメモで十文字しかまとめてないので、申し訳ないです。

川合：蟬の鳴き声と解放感が、繋がっているという読み方は、たぶんそれでよいでしょうね。

川合：この論文を書くか書かないか、そのころですけれども、台湾の清華大学で、講演に使ったんですね。そしたら、そこの若い人たちが一斉に「台湾では蟬は夏鳴く」と言い出して、そしたらそこの先生が「いや、文学の中では秋なんだ！」と言って（一同笑い）、そのときはそこで終わってしまったんですけれども、僕もなんとなくその辺りから

気が咎めておりまして、今日の発表を聞いて、その後の展開が分かりました。

まず、こういう経験は初めてですので、非常に感激するのはですね、僕は書いたものなんて、誰も読んでくれてないと思ってまして（笑い声）、この論文については、お一人だけ、読んだことが分かった方がいたんですが、というのは、これを載せた『文學報』が出た直後にですね、振替用紙っていう、お金送ってもらう紙があるんですが、それを使って、戸川芳郎先生がですね、「俺の論文を読んでない」と書いてこられまして（笑い声）、慌てて見たら、蝉の飾りと士大夫の寓意についてのとても詳しい論文をもうすでに戸川先生が書かれていました。そういう考証とは中味が違うので、引かなかったのは失礼ですけれども、あまり大きな変更はなかったんですが、まぁそういうように、全然、読まれていないと思っていたものを、こうやって丁寧に読んでいただいて、しかもそれを元に考えてくださって、事前の勉強会までしていただいたというのは、それだけでたいへん嬉しいです。おっしゃることは、要するに羊士諤あたりから、夏の日の快さが、一つの詩の題材として詠われるようになってくるということで、そのときに蝉が出てくるわけですね。蝉が夏の描写の一つの材料として出てくるわけです。これも、昨日講義で出た話とむりやりこじつけると、中唐以後から、詩の中で扱う抒情の形が多様化してゆく。それまでは、決まった抒情形態しか歌えないから、蝉は秋の蝉に決まっていましたが、そこからはずれたことも詠えるようになっていく、そういう一つの表れかも知れませんね。それから宋代以後、蝉が悲哀から解き放たれるというふうに言われましたが、論文を書いた当時、さっと見た感じでは、詞の中では物寂しい、哀れな蝉というのが、非常に決まったパターンとしてあるように思いました。蘇軾の蝉がそうでないというのは、やはり蘇軾が「豪放派」と言われるからではないかな、と思いました。

それから陸游の冬の蝉が出てきました。誰だったか、冬の蠅もこういう風に使っているのがあって、冬の蠅と冬の蝉というのは、おそらく同じような捉え方があると思うんですね。それから大山さんが指摘された、現代に於ける蝉は、高潔なんてものじゃなくて、騒がしい、苛々するものである、というふうに言われたんですけれども、蝉のそう

いう方向を、たぶん最初に指摘したのは韓愈だと思うんですね。で、これは勝手な推測なんですが、もしかしたら、蝉を騒がしいものとして捉えるのはずっと昔からあったのではないかと思うんです。ただ、出てこない。普通の士大夫が捉えると、露を飲む高潔なものという捉え方だけが出てきて、だけどその下の方では、やかましいものという見方もずっとあって、それが韓愈あたりからぽこっと出てきた。そして今はこちらの流れがはっきり見えるという風に考えることができるかもしれないですね。

戸倉：詞の中で蝉が哀しいというのは、それはやはり声がですか？

川合：そうですね、やはり声が主でしょうね。だとしたら、やはり秋の蝉でないとね。

高芝：私が見た限り、詞の中に出てくる蝉は、夕陽とセットになっていることが多く、蝉がかしましく鳴いて夕陽が傾くという組み合わせがたくさん見られたので、そういう意味では、川合先生がおっしゃる通り、類型化というのはあると思います。

古川：僕の理解が間違っているかもしれませんが、お話を聞いて、初盛唐だけが夏の蝉がなくなっているというのが、なんとなく変だなという感じを受けました。今までの常識ですと、だいたい六朝の伝統を初唐盛唐まで継承して、中唐から変化するという図式だったと思うんですが、そうではなくて、晋宋までは夏の蝉の伝統があるんですか？初唐盛唐で夏の蝉がなくなって、中唐以降、復権したとなると、なんとなく今まで知っていた図式からずれるなぁと思うんですが。

高芝：図式化するならば、『詩經』のころには夏にうるさかったのが、六朝期にぐっと下がって、初盛唐に底辺に行ってから、中唐からまた復帰するという流れなんだと思います。だから六朝の辺りにも順調に減っていたんだと思います。

古川：それでは、六朝にも秋の蝉が優勢なのでしょうか。

高芝：ええ、そうですね、初盛唐に比べればましだけれども、やはり秋の蝉の方が多くなっているということですね。ご説明が足りなくてすみません。

梶村：私の質問は大したことじゃないんですが、姚合と貫休ですか、高芝さんはこの蝉は、本来は秋に出てくるはずのものが、夏に出てきてしまって、暑さでむせいでいる、というイメージなんですか？それとも夏に出てくるべきもの、暑さは平気なはずの蝉が、それですら、あえいでいるという、そういうイメージなのですか？これは私は、秋の蝉で、それが間違えて、夏に出てきてしまって、「ああ、暑い」と言って、むせいでいる、鳴いているか鳴いていないかはよく分からないんですが、そういうイメージなのかなと、思ったんですけれど。

高芝：でも、詩の中で秋の蝉しか描かれなかったとしても、実際に蝉は夏でも鳴いてたはずだと思うんですよ。初盛唐期は夏の蝉は鳴かなかったのかというと、そんなわけはないと思うので、だから中唐になるとそういうものを詩に描くようになったというだけで、別にこれは秋の蝉を夏に見付けて、「わぁ可哀想だ。暑そうだ。」と思っているわけではないと、私は思います。

梶村：そうすると、どうなんですかね？夏の暑さも知っているはずの蝉も鳴けないぐらい、暑い！ああ、私もそれは良いと思うんですけど、でも、秋の蝉っていう解釈もできるんじゃないかなぁとは思います。そこはまだ、私は納得できない。

戸倉：ここは秋に読まなくても良いんじゃないですか。むしろ夏の蝉なのに、蝉さえも、暑くてあえいでいる方が夏の暑さが強調される。

梶村：夏に、暑さにもめげずに鳴いている蝉は、それまでの例であまりない、挙がってないですよね。

高芝：蝉は秋のものだ、という前提があったから、蝉が鳴いたら涼しくなるというお約束が詩の描き方としてあったと思うんですね。だから、初盛唐だと暑さにめげず鳴く蝉という描き方をしにくかったのではないかと思うのですが。特に暑さと組み合わせて蝉を描いているというのは、たぶん、姚合の辺りが私の見付けた限りでは、一番古いように思います。それ以前でも蝉が鳴くことが、夏の記号にはなるんですが、暑さと組み合わせるのは、確かに、この辺りからなのかも知れないです。

大山：動詞なんですけれども、普通は「鳴」「蟬鳴」のように「鳴」を使いますよね。「鳴」という動詞になると、すごくきれいに聞こえます。ところが、「噪」になると、いかにもうるさい。今回調べた結果、「鳴」と「噪」ではそういう違いはありますか？

高芝：私も、「噪」の方が夏で、「鳴」が秋だったら、幸せだなと思ったんですけれど、秋の蝉も、うるさい方で鳴いていたり、夏の蝉が「鳴」だったりして、これは特に使い分けはなかったです。他に、中国音で何て読むか分からないんですが、この字で鳴いている蝉も居るんですね。（「嘶」を板書）あ、sī ですか。これも馬がいななくイメージが日本語だとあるのですが。うるさい感じでしょうか？

大山：聞きたいのは、ある時期では「鳴」が多く使われて、ある時期になると、「噪」が多く出てくるという傾向は見られますか？

高芝：時代的な流れですか？たぶん、うるさい方が、後世に行くに従って増えるんじゃないかと思います。数量的に確実なデータは手元にないんですが、見ていった感覚では、さわがしい、うるさいというものが後の方に多い。唐代半ばくらいから先に多い、というような気がします。用例を見ていただいても分かるように、「響」や「鳴」という字を使ってある方が、初盛唐までには多く、さわがしいという字を使ってあるのが中唐以降に多いんじゃないかと

思います。

戸倉：貫休の詩の「蟬が喘ぐ」という句は、声が聞こえているのだろうかという問題が提起されましたが、「雷乾く」というのもどういうことだったんでしょうか。

高芝：これは、雷も鳴らない、といって、雨も降らないことを暗示するのかなと思ったんですが。「からかみなり」というんでしょうか、雨が降らないで雷だけ鳴っているというのも、解釈としてありなのかもしれない、というご指摘を、千葉さんでしたかしら、どなたかから頂きましたので、これも蝉の声と一緒で、音がするのかしないのかというのは、解釈が分かれるところだと思います。

鈴木（弥）：私はやはり蝉は鳴いているのではないかと思います。蝉って、鳴き声の割にすごく小さいじゃないですか。だから、鳴いてもいないのに、ああ、あそこであえいでいるなんていう風には、たぶん、思わないと思います。その鳴いているという行為そのものが、暑さにあえいでいるんだというふうに受け止められているのではないかと思うんですが。みなさま、どうでしょうか？

高芝：夏の蝉は、葉っぱが多い時期の蝉なので、姿が見えない、秋の蝉だと、葉っぱがすかすかだから、姿が見えるという描き方になることが多いので、これは真夏だから、姿が見えにくいという鈴木さんのご指摘は、確かにあると思います。ただ、朝に鳴いてて、昼頃、暑くなってきたら声がしなくなってしまったというのが、確か山崎さんのご指摘だったと思うのですが、そういうふうに考えると、音がしなくなったというところに、暑さを感じることも可能かなとも思います。

戸倉：朝鳴いていたのが、昼頃になくなったというのは、この詩の中ではないですよね。どこでそういうように読めるのでしょうか。

山﨑：この詩を読んでふと思ったのが、それだったんですが。授業の中で、自分の経験に引きつけて詩を読むのは良くないというお話を、川合先生がなさっていたので、それなのに、自分の経験に引きつけて読んでしまって良いのか、今、たまらなく問題なんだと思うんですが、私の場合には、真夏に気温が四十度くらいを越えてしまうと、蝉は鳴かなくなるというのが、経験としてあったものですから。朝は鳴いていても、本当に暑くなると、一回蝉は鳴くのをやめて、夕方前、三時過ぎくらいになったら、また鳴き始めるという経験があったのです。それから後ろの「雷が乾く」という句が、自分の中では引っかかっていまして、これも音がするのかしないのか、「雷が乾く」が、音がしないのであったら、「蟬が喘ぐ」のも、音がしなくて良いんじゃないかなというふうに思ったというところです。

高芝：気温が上がると蝉が鳴かなくなるというのは、生物学の方で証明されているようです。個人的な体験ではなく、根拠のあることと思ってよろしいのではないかと思います。

大山：蝉はもともと連続的に鳴くんですよね。ところが、自分の記憶の中では、本当に暑くなったら、「じ、じー、じ」、その声が断続的になるのではないでしょうか。私はこの「喘」はそういう音じゃないかなと思います。

遠藤：今までの話題から全く変わってしまうんですが、「蝉の声が中唐以降、詩人たちによって再発見され、あるいはその感受性回路を逆手に取った表現を試みたことは評価されても良いと思う」というのが高芝さんのお話でしたが、先ほど川合先生がおっしゃったように、中唐以後、抒情の多様化があって、蝉といった事物に関わらず、使い古された典故といったレベルにおいても、やはり中唐以降、従来と違った観点での利用が増えてくるように思います。自分は李賀をやっているんですが、李賀には、従来の既成の価値観を逆手に取った表現が非常に多くて、たとえば不老長寿の代表的な神さまを、何回も殺したりします。これは李賀独自のものかと思って、一時期調べたところ、同時代の中唐詩人たちは結構そのような典故の反用というか、逆手に取った表現を多くしていると思いました。実は李白にも

多くて、それが面白いところだ思うんですが、そういった流れの中で、蝉もある。つまり、川合先生がおっしゃる通りだなということを再確認した、ということを言いたいと思います。

馬場：ちょっと論理的なことなんですが、初唐から盛唐にかけて夏の蝉が黙るとあって、その理由の一つに、中国文学における夏の描きにくさがあげてありますけれども、ここで松浦先生が言っているのは、古典詩全般のことであって、これをもって、夏の蝉が沈黙したといきなり言ってしまうのは、かなり論理の飛躍があるように思うんですが。

高芝：すみません。ここはすごく、不親切な形になっているんですけれど、二つの項目を述べていて、一つは蝉と秋の結びつきやすさという点。もう一つは作品の絶対数が夏の方が少ないから、秋の方が目立ってしまう、秋の蝉の方が多いように見えるという方向もあるのではないかということをいっています。松浦先生の論を引いて、よって夏の蝉が絶滅したというふうに持っていきたかったわけではないので、その辺のところはお分かり頂きたいと思います。

馬場：高芝さんが引いているように、六朝では夏の蝉がいるのに、初唐盛唐では少なくなると言うなら、初唐盛唐にはそもそも、夏を詠む詩そのものが少なくなっているとでも言わないと、ちょっとこれだけでは論理的に飛躍があるのじゃないかなと思います。中国では全般的に夏の詩が少ないのに、現に六朝では、夏の蝉があるわけですよね。

高芝：そうですね。六朝に夏の蝉があって、それ以降になくなる理由としては、論理がおかしいですね。初盛唐の中に少ないのはなぜかという理由の一つとして、これは補足的に挙げたことなので、もう一度説明の仕方を考えたいと思います。ありがとうございました。

注

（1）「隕蘀」については毛伝に「隕墜、蘀落也」とあり、疏に「隕蘀、謂草木墜落」とあるなど、「十月は草木が枯れ落ちるころ」

と解釈されることが多いようである。また、「一之日」などの表現にも、「十一月」「一月」など各種解釈がある。だが、双方ここでは意味内容的に問題のある箇所ではないので、仮に『新釈漢文大系』の訳に従う。

(2) 唐詩には高適「蟬鳴木葉落　茲夕更愁霖」（「東平路作三首」全唐詩巻二一二）、李端「復洞潛棲燕　疏楊半翳蟬」（「酬前駕部員外郎苗發」全唐詩巻二八六）など、蟬が鳴くのは葉の散りかけた木であることが多く、葉が密であることは少ないので、ここでは「茂っているのに」と訳した。

(3) この作品は、熙寧四年（一〇七一年）に蘇軾が王安石の新法に反対して、杭州に左遷されたときの旅路で詠んだものとされる。「吾已行亦偶然」との口調は必ずしも本音を述べているわけではないだろうが、この八首の連作は全て、旅路を楽しむような軽快なタッチで統一されている。

(4) 王水照選注『蘇軾選集』（上海古籍・一九八四）を初めとして多くの注釈書が朱祖謀『東坡楽府』の説に従って「鷓鴣天」を元豊六年（一〇八三年）初夏の作品とする。唐圭璋主編『唐宋詞鑑賞辞典』（江蘇古籍出版・一〇八六）は元豊三年の初秋の作品とするが、一般に初夏の風景とされている。だがたとえば「衰草」「紅蕖」の組み合わせでは、韋應物に「秋塘遍衰草　曉露洗紅蓮」（「曉至園中憶諸弟崔都水」全唐詩巻一九一）という句がある。「衰草」は主に秋に描かれる語であることを考え合わせても、ここで蘇軾は初秋の風景を述べているのではないだろうか。

(5) 秋の蝉「秋日寄友人」（別後過從更疏懶　暮蟬嘹亂不勝悲）、「鷓鴣天」など
夏の蝉「出都來陳所乘船上有題小詩八首　不知何人有感於余心者聊爲和之其一」
「皇太后閤六首其四」（秘殿扶疏夏木深　雨餘初有一蟬吟）など
隠士・道教的寓意「定惠院顒師爲余竹下開嘯軒」（飲風蟬至潔　長吟不改調）
「遷居」（雖慚抱朴子　金鼎陋蟬蛻）など

(6) 羊士諤「酬盧司門晚夏過永寧里弊居林亭見寄」（全唐詩巻三三二）
自嘆淮陽臥　誰知去國心　幽亭來北戶　高韻得南金
苔甃窺泉少　籃輿愛竹深　風蟬一清暑　應喜脫朝簪